

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

アメリカのテレビドラマにおける「説得場面」の特徴について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2022-03-11 キーワード (Ja): コミュニケーション・スタイル, 英語らしい話し方, 説得場面 キーワード (En): 作成者: 近藤, 富英 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00008028

アメリカのテレビドラマにおける「説得場面」の特徴について

近 藤 富 英

要 旨

英語での効果的でストレスの少ないコミュニケーション活動のためには、発音や文法の他に英語におけるコミュニケーション・スタイルの違いや英語独特の会話の展開の仕方も同時に知ることが必要になってくる。すなわち「英語での装い方」、「英語らしい話し方」とは何かということである。アメリカのテレビドラマの一部分を使って、とくに「説得場面」を取り上げてその特徴や日本語との違いに言及している。英語圏の価値観はその人間関係において互いに対等であることをまず求めているといえる。英語で相手を説得したいと思うときには、相手の感情に訴えて述べるのではなく、あくまでも対等に向き合い、論理的で毅然とした態度が評価され、初めて説得することが可能となる。そこには地位や年齢の違いも無いのである。そしていったん納得すれば、意見を変えることはよくあると言える。そのような英語の会話における特徴も体系的に英語教育に取り入れられるべきであろう。

キーワード：コミュニケーション・スタイル、英語らしい話し方、説得場面

1. はじめに

英語の習得に努める日本語母語話者が英語での円滑で誤解の無いコミュニケーションを行うためには発音や文法の他に、英語圏の価値観やその文化的前提、外界の認知方法、そしてそこから生じるコミュニケーション・スタイルや行動パターンの違いについて理解することも同様に大切であろう。すなわち、英語圏の生活におけるさまざまな場面や状況において、どのように相手に向かい合い、その場面ではどのようなことを言うのが相応しく、また期待されているのか、そしてどのようなことが違和感を覚えさせ誤解を生じさせることがあるのか、さらに英語特有の話し方や話題の展開の方法などについても体系的に学んでいくことが効果的かつ効率的なコミュニケーションのためには必要になってくる。すなわち、「英語らしい話し方」とはどのようなことなのかということである。

もちろん、文化的背景が異なっても同じ人間として相手を尊重し丁寧に接し、相手に気持ちの良い時間を過ごしてもらいたいという思いはどの文化においても基本的には同じであろう。ただし、それを実践するときに異なった発話やコミュニケーション行動として現れることがあ

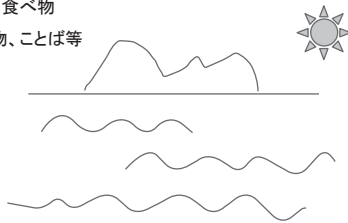
る。ときには正反対のように見える行動や発話がなされることもある。このことは「文化の装い方の違い」ということもできる。コミュニケーションを円滑に行うためにその価値観や民族の心理を身に纏うのである。それは多くの場合は、幼いころから周りを見ながら身に付けてきたものである。その装い方やコミュニケーション・スタイルの違いはさまざまな場面で現れるが、本論ではとくに英語圏における「説得場面」において、どのような特徴が見られ、また日本語とはどう違い、そしてどのような英語圏の人々の価値観や心理を反映しているのかを考察するものである。説得場面を今回とくに取り上げたのは、とくに日本語の場合と大きな違いがある場面のひとつだと考えられるからである。

2. 見える文化 (Culture) と見えない文化 (culture)

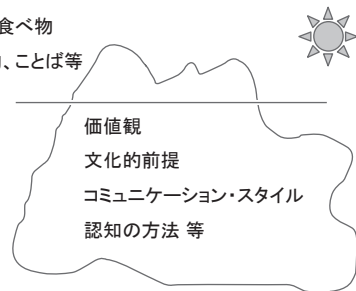
上で「文化の装い方の違い」について言及したが、この「装い方」というのはその文化の価値観や文化的前提、外界の認知方法などが影響してコミュニケーションや行動パターンの違いとして現れるものである。したがって、普段はなかなか気づかれず目に見えにくい文化 (culture) と言えよう。それに比べると異文化における服装や食べ物、建築物や言葉そのものなどは違いにすぐ気づくことのできる目に見える文化 (Culture) と言える。下の図は文化を氷山にたとえたものである。価値観をはじめとした文化の多くの部分は海の中に沈んでいてなかなか気づきにくいものである。

文化は氷山のよう

服装、食べ物
建築物、ことば等



服装、食べ物
建築物、ことば等



コミュニケーション行動において時として違和感や居心地の悪さを覚えたり、誤解を生じさせるのは、この「目に見えにくい文化」である。英語習得においては発音や文法の他に、この目に見えにくい文化を体系的に学ぶことが必要となってくる。

3. 説得場面について

英語のコミュニケーション行動は、場面を察して空気を読むというよりは言葉で表現することが大事だとよく言われる。言葉で伝達する比重が高く場面に頼らないため、いわゆる low-context 文化だとも言われる。場面と言ってもその種類は「依頼」、「勧誘」、「提案」、「忠告」、「注意」、「激励」、「同意・不同意」など日常生活にはさまざまな場面が存在するが、今回はとくに「説得」場面を取り上げる。英語圏のドラマや映画にしばしば登場するこの「説得」場面は日英のコミュニケーション・スタイルの違いが大きく表れる場面のひとつだと思われるからである。英語における説得場面にはどのような特徴があるのか、例を上げながら考察を行う。日本語でも相手を説得することはあるものの、日常生活においては相手と直接対峙するような場面はできるだけ避けたいと思うのが日本文化ともいえる。そのために日本文化では事前の根回しが好まれたり段取りが決められることも多く、また婉曲的表現も好まれてきたと考えられる。

4. 説得場面の事例について

説得場面の現れた事例であるが、今回はアメリカのドラマの中から3例を取り上げて考察を行う。もちろん、日本語にも説得する場面はあるが、英語には日本語とは異なった雰囲気と英語独特の話し方があるようだ。ここでは、以下の3つのアメリカのドラマの一部から説得場面を取り上げながら、その特徴を考察する。

- (1) 大草原の小さな家 (*Little House on the Prairie*)
- (2) スタートレック (*Star Trek: The Next Generation*)
- (3) フルハウス (*Full House*)

説得場面の特徴を見るにあたり、今回は上記のテレビドラマを使用した。その理由について触れておく。分析のための資料としては、テレビドラマを含めて以下の(1)～(6)が考えられる。

(1) テレビドラマ、(2) 映画、(3) 小説、(4) 実際の場面状況の設定を伝えて、どのような説得をするか(どのようなことを言うか)をインフォーマントに口頭あるいは記述で答えてもらったもの、(5) ペアになってももらったインフォーマントに場面状況の設定を伝えて、説得する役と説得される役に分かれて会話をしてもらい、それを録画したもの、(6) 実際のリアルでオーセンティックな説得場面を録画したもの。

あとのp.310～311の6で紹介している日本人のインフォーマントに場面を説明して日本語の

場合の説得のようすを書いてもらったのは、上の(4)にあたる。このような研究においては、上の(6)のように実際の生の会話を用いることが理想的ではあるが、データの収集方法としてはかなり難しいものである。次善の策として上記の(1)のテレビドラマや(2)の映画が役に立つと考えられる。もちろん、テレビドラマや映画には脚本家や監督などが存在し、その製作には人為的で作為的な面があるが、その文化の中での自然な会話の流れや価値観を反映しているとも言える。そのため、テレビドラマや映画を用いることに大きな問題は無いと考えている。また、(3)の小説よりはテレビドラマや映画の方が、より実際の会話に近いと考えられる。なお、映画とテレビドラマは同等な資料として用いることが可能だと思われるが、より日常生活に近いのはテレビドラマだともいえる。そのような理由で今回はテレビドラマを利用した。なお、とくにこれら3つの作品を利用した理由は、『大草原の小さな家』と『フルハウス』は日常生活を扱ったホームドラマであり、また『スタートレック』はSFではあるが、アメリカの日常生活の価値観を色濃く反映しているからである。たとえば資料としては、階層意識がとくに強い軍隊などをテーマにした映画やドラマは日常の行動や価値観からやや逸脱している可能性があるため避けるべきだと考える。ただし、実際は上記の(1)から(6)までのいくつかの資料を同時に用いることも考えられる。

5. 説得場面の事例

5.1 『大草原の小さな家』からのケース

「例1」はメアリー (Mary) と付き添いの父親であるチャールズ (Charles) がメイフィールド教授 (Prof. Mayfield) を説得しようとしている場面である。メアリーの夫であるアダム (メアリーとアダムはふたりとも目が不自由である) は長年の夢だった弁護士になる試験を受けていた (試験は複数日に渡る) が、試験半ばで不慮の事件のために体調をくずし、試験を最後まで受けることができなかった。そのことを知ったメアリーは父親のチャールズとともに、アダムが再試験を受けられるように試験官のメイフィールド教授のところへやって来たところである。

例1 :

Charles: Professor Mayfield?

Prof. Mayfield: Yes.

Charles: They told us in the office we could find you here. I'm Charles Ingalls, and this is my daughter, Mrs. Kendall.

Prof. Mayfield: Mrs. Kendall.

Mary: My husband is Adam Kendall.

Prof. Mayfield: Adam? The name is familiar.

Mary: Yes, he was taking the exam this past week.

Prof. Mayfield: Oh, yes, yes, he was unable to complete it.

Mary: That really wasn't his fault.

Prof. Mayfield: Yes, I understand that it was most unfortunate.

Mary: I, I want to know if there was any way he could complete the test. It means so much to him.

Prof. Mayfield: Mrs. Kendall, I'm sorry. I wish there was a way, but we can't alter the rules here no matter what the circumstances.

Mary: Why not?

Prof. Mayfield: Pardon me?

Mary: Why can't it be altered? I mean this is the school of law, isn't it? When you have a bad law, the court changes it, doesn't it?

Prof. Mayfield: Yes, the court does have that power, but ...

Mary: Then if you have a bad rule, I think it should be changed.

Prof. Mayfield: I don't believe it is a bad rule. It's a necessary one.

Mary: It's a bad rule when it has no compassion or concern for the individual.

Prof. Mayfield: Mrs. Kendall.

Mary: My husband's gone through a lot in his lifetime. He was blinded in an accident when he was a boy. He lost his child in a fire. With all that, he's devoted his life to helping others, to teaching. Now when it seems like something wonderful is going to happen, you turn against him with some rule. Now you may think it's necessary, but I happen to think it's cruel. Come on, Pa.

Prof. Mayfield: Mrs. Kendall, you should've been a lawyer. Have your husband here at nine a.m., Wednesday.

Mary: Thank you, sir.

(Little House on the Prairie, Season 7, No 11, "To See the Light" (Episode 2))

以下に和訳も示しておく（和訳はNHKの放送時の字幕を使用）。

チャールズ：メイフィールド先生ですか？

メイフィールド教授：そうですが。

チャールズ：ここにおられるかもしれないと言われました。インガルスといいます。こちらは娘のメアリー・ケンダルです。

メイフィールド教授：どうも。

メアリー：夫はアダム・ケンダルです。

メイフィールド教授：アダム？聞いた名前だ。

メアリー：ええ、先週こちらで受験をしました。

メイフィールド教授：ああ、途中で棄権しましたね。

メアリー：それは夫のせいではないのです。

メイフィールド教授：ええ、不運なことだったと思っています。

メアリー：何とか残りを受ける方法はありませんか。夫にとっては大事なことなんです。

メイフィールド教授：ケンダルさん、そうだといいとは思いますが、事情はどうあれ、規則は
変えられません。

メアリー：何故ですか？

メイフィールド教授：何故とは？

メアリー：何故変えられないのですか？ここは法律学校ですよ。悪法なら裁判所が変えます
よね？

メイフィールド教授：ええ、裁判所にはその力があります。しかし、

メアリー：悪い規則も変えるべきだと思います。

メイフィールド教授：悪いとは思いません。必要な規則です。

メアリー：人に対して情や思いやりに欠ければ悪い規則だわ。

メイフィールド教授：ケンダルさん。

メアリー：夫の人生は苦難続きでした。子供の頃、事故で失明し、火事で息子も亡くしました。

それでも教師として人のために働いてきました。やっと良いことが起きようとしているの
に、それを規則で容赦なく潰すなんて。そんな規則が必要ですか？私は非情だと思います。
行きましょう！

メイフィールド教授：ケンダルさん、あなたは弁護士になるべきでしたね。ご主人の追試は水
曜日の9時からです。

メアリー：感謝します。

あくまでも規則を理由に再試験はできないというメイフィールド教授に対して、メアリーは
受けられなかったのは夫のせいではないこと、そして事情によっては規則は悪い規則になるこ
と、そして悪い規則は裁判所なら変えるべきだということを述べる。毅然とした態度で論理的
に説得するメアリーに、最初は受け付けなかったメイフィールド教授は最後には再試験を認め
ている。ここで特筆すべきはメアリーの態度である。立場の弱いメアリーであるが、けっして
同情を求めたり懇願したりせず、あくまでも対等な立場で理路整然と説得しようとしている。

英語では感情に訴えるのではなく、上下関係も性別も無くただ事実と論理で訴えることが大切なことがわかる。日本語なら同情を求めたり、懇願する態度が相手の心を動かすかもしれないが、英語では逆だということがわかる。

5.2 『スタートレック』からのケース

「例2」はアメリカのSFドラマの『スタートレック』シリーズのStar Trek: The Next Generationからである。宇宙船エンタープライズの機関部長であるラフォージ (La Forge) は、かつてある惑星に降り立ったが、その惑星と一緒に上陸した同僚たちは身体が他の生物体に変化し始め、さらにその惑星に戻ろうとする気持ちに駆り立てられていることがわかる。ラフォージは自分の身にも同じことが起きるのではないかと思い、その原因を自ら突き止めようとしたがっている。ラフォージの体調を心配したピカード艦長 (Picard) と医療部長のドクター・クラッシャー (Dr. Crusher) は医療室にいるように言うが、ラフォージは調査を進めさせて欲しいとピカード艦長を説得しようとする。

例2 :

Picard: Mr. La Forge, what if you begin to change, what if you feel compelled to go down to the planet like the others?

La Forge: Program the computer to monitor my movements. That way we can be sure that I don't leave the ship. What would you do, Captain? Would you sit it out here in sick bay? Or try to learn what it is that's got you, and maybe stop it?

Picard: Very well, Mr. La Forge. You proceed with your investigation but I want you to report to Dr. Crusher for a bioscan at the start of the day watch.

La Forge: Aye, sir!

Dr. Crusher: Geordi, if you have symptoms of any kind, I want to know immediately.

La Forge: Understood.

(*Star Trek: The Next Generation*, Season 4: Episode 18, Identity Crisis)

以下に和訳を示す (和訳はDVDの日本語版を使用)。

ピカード: もし変化が始まって君も惑星に降りたい気持ちにかられたらどうする?

ラフォージ: コンピュータを使って私の行動をモニターさせれば、どんなことをしたって艦を降りられません。艦長ならどうされます。座って待ちますか? そうはしないでしょ。どうか原因を探ろうとするはずです。違いますか?

ピカード: よしわかった、ラフォージ。調査を進めたらいい。だが、デシフトの前に必ずド

クター・クラッシャーに診察を受けるんだぞ。

ラフォージ：了解。

クラッシャー：あー、それから少しでも何か症状が出たらここに来て、すぐによ。

ラフォージ：わかりました。

この例でもラフォージは目上の艦長に対して、整然と非常時の際の対処法を説明し説得を試みている。ラフォージは単にお願いしたり感情に訴えるのではなく、艦長と対等に接していることがわかる。そして「例1」と同じように納得されれば、即座に相手の意見を認め自分の考えを改めている。

5.3 『フルハウス』からのケース

『フルハウス』はいわゆるアメリカの「シットコム (situation comedy)」であり、笑いが状況設定の中心になっているドラマである。ダニー (Danny) は妻が亡くなりシングルファーザーとして3人の娘を育てているが、6歳になる末娘のミシェル (Michelle) が長女であるDJのボーイフレンドのステーブ (Steve) と結婚したいと言い出す。DJとステーブはミシェルを楽しませようと結婚式ごっこのつもりだったが、からかわれたと思ったミシェルが自室に飛び込んだ場面である。父親のダニーが状況を説明し機嫌を直すように説得しようとしているところである。この場面は見方によっては「説明」や「慰め」の場面とも考えられるが、ダニーが父親としての考えを伝えている説得場面とした。

例3

Danny: Michelle? I'm sorry you feel sad, honey.

Michelle: Why won't Steve marry me?

Danny: Honey, you're six years old. You're too young to get married.

Michelle: But I love Steve.

Danny: Look, I know you do, but it's not the same kind of love that grownups feel when they get married.

Michelle: I hate being a kid. I can't stay up late, I can't cross the street, I can't get married.

Danny: Oh, honey, I know how you feel. It's tough being a kid, and sometimes people forget how little kids have feelings. And right now, you're...what you're feeling is a broken heart.

Michelle: Can you fix it?

Danny: I'll try, but you got to understand, see, Steve is DJ's boyfriend. She loves him and he

loves her.

Michelle: It's still broken.

Danny: Give me a hug. Come on. One day, you'll be all grown-up, and you'll have a boyfriend, and then you'll fall in love. When you're older than that, much, much, much, much, much, much older than that, you'll get married. You'll get married because you want to spend all your time with that person.

Michelle: I don't want to wait.

Danny: There's something great about waiting for the person you love.

Michelle: What?

Danny: Well, meantime, you get to be with the people you love. You know, your family. We'll make sure you have lots of fun, lots of hugs, and lots of kisses.

Michelle: I think my heart is feeling better.

Danny: Aw, that's my girl. I love you so much.

(*Full House*, Season 6, Episode 16, "The Heartbreak Kid")

以下に和訳を示しておく（和訳はDVDの翻訳による）。

ダニー：ミシェル、かわいそうに、つらいよね。

ミシェル：なんでスティーブは結婚してくれないの？

ダニー：ミシェル、お前は6歳だよ。結婚するには早すぎるよ。

ミシェル：でもスティーブが好きだもん。

ダニー：（ため息）そう、それはわかってるよ。でもお前の「好き」は結婚する大人同士の「好き」とはちょっと違うんだ。

ミシェル：あたし、子供ってやだ。早く寝なくちゃいけないし、道は渡れないし、結婚もできないんだもん。

ダニー：ああ、そうか。その気持ちはわかるよ。子供ってつらいよね。おとなはちっとも子供の思いをわかってくれないし。今もこうしてお前のハートはこわれてしまった。

ミシェル：治してくれる？

ダニー：やってみよう。でも、よく考えてごらん。スティーブはお姉ちゃんのボーイフレンドだ。二人は愛し合ってるんだよ。

ミシェル：まだ、治んない。

ダニー：よし、おいで。いいか、いつかお前もおおきくなってボーイフレンドができる。そして恋をする。それから、もっとあとで、もっともっともっともっとずーとずーとあとだけ

ど結婚をする。その人とずっと一緒にいたくなったら結婚するんだ。

ミシェル：そんなに待てないよ。

ダニー：でも、好きな人を待つってすてきなこともあるんだよ。

ミシェル：どんな？

ダニー：待ってる間に好きな人たちと一緒にいられるだろう。たとえば家族だ。一緒に楽しいことをしたり抱き合ったりキスし合ったりね。

ミシェル：ハートがちょっと治ってきた。

ダニー：よおし、その調子だ。パパは安心したよ。

この「例3」において、父親のダニーはまだ6歳であるミシェルに対して、きちんと自分の考えを説明しているのが印象的である。すなわち、ダニーはミシェルの言う「好き」はいわゆる大人の「好き」とは違うということ、そして子供にはできないことが多くてつまらない、と言うミシェルに対して、姉とボーイフレンドは愛し合っていること、そしていつか将来ミシェルも結婚するだろうということを話す。それまで待てないというミシェルには、待つことにも大好きな家族と一緒に過ごせるなどすてきなことがたくさんあると説明している。ここでも相手を子ども扱いせず、子供にもわかるようにそして対等に論理的に説明して説得しようと試みている。

6. 英語の説得の特徴とその背景

今までの例でわかるように、英語圏の文化において説得は日常生活においてよくある大切な場面のひとつである。そして説得場で求められることは、感情に訴えながら憐れみを乞うようなものではなく、相手がたとえ地位や関係で上位にあっても、正面から対等に向かい合い、毅然とした態度で論理的に説明し説得を試みるのが基本的な英語圏の考え方であることがわかる。同時に子供に対しても大人と同じような扱いをしようとする。

ここで上記「例3」の『フルハウス』のケースであるが、同じような状況でどのような説明をするかを4人の日本人に尋ねたものがあるので以下に示す。インフォーマントには、日本語での場面で起こったことだと説明して、「同じような状況において、あなただったら6歳の女の子にどのようなことを言って説得をするか」を尋ねたものである。

(フルハウス1)

ごめんね。騙すつもりはなかったけど、嘘をついてしまって。〇〇ちゃんはまだ6才で小さいから本当の結婚はまだできないんだよ。結婚するには、男性は18才、女性は16才にならないと

できないし、未成年といって20才までの人は親の許しがいるんだよ。だから、大人にならないと結婚はできないし、大人になるということは、とっても時間がかかるんだ。今、〇〇ちゃんの」することは、学校へ行ってしっかり勉強したりお友達をいっぱい作ることだね。(50代男性)

(フルハウス 2)

君がとてもかわいくて楽しそうだったから、彼はもっと君といっしょに遊びたくて、『結婚しよう』と言ったと思うよ。でも彼もまだ結婚したことがないから、本当の結婚をしらないんだよ。だから、彼もちょっと「結婚ごっこ」をしてみたかったんだと思うよ。君はまだ6才で君の知っている男の子は少ないと思う。これからたくさんのすばらしい出会いがあるはずだから、まだ結婚するなんて早すぎると思うよ。(40代女性)

(フルハウス 3)

彼はこんどお姉さんと結婚して君のお兄さんになるんだよ。君は前からお父さんと結婚したいと言っていたが、お父さんとは結婚できないのと同じように、お兄さんとは結婚できないが、お姉さんと結婚すれば、いつでも近くにいてくれるよ。(50代女性)

(フルハウス 4)

お父さんもお母さんも家族みんながあなたのことが大好きだから、あなたが本当に結婚してこの家から出て行ってしまったら、とても悲しい。それにあなたは、まだおいしいご飯を作ったりお掃除したりすることができないからとても心配。もちろん彼もあなたのことが好きだから、今までどおり仲良く遊んでくれる。だからもう少しこの家において私たち家族といっぱい遊んだりお話したりして欲しい。(40代女性)

上の(フルハウス 1)は、結婚についての法律の説明をした後、今やらなければならないことを伝えようとしている。(フルハウス 2)では相手も結婚ごっこで遊びたかっただけで、結婚は早すぎると言っている。(フルハウス 3)では、お姉さんと結婚してお兄さんになるので結婚はできないと述べている。(フルハウス 3)では、あなたが結婚して出ていくとさびしくなるし心配だと感情に訴えているようだ。

もちろん、ドラマの中のダニーの例を含めて、どの説得方法が一番優れているかということではない。個人の性格や個々の家族の事情もあるであろうし、さらには文化的背景によっていけばその文化で合理的で理想とされる説得方法は異なってくる。中には、丁寧な説明はせず、極端な場合には「ほっておけばいつか子供は機嫌が直るものだ」と考えて、まったく言葉による説明をしない家庭や文化もありそうである。ちなみに、そのような家庭環境が子供の論理的

で丁寧な説明の力を阻害することは充分考えられることではある。しかし、どちらにしてもどれがいい悪いということは言えないであろう。

ただし、前述したように、英語文化の場合は、相手としっかり向き合い、この事態に及んでこちらがいかに困っているかをただ情に訴えて述べるのではなく、あくまでも対等に毅然とした論理的な説得を試みるべきであろう。

7. 英語圏の説得の背景にあるもの

上記のような論理的で毅然とした説得方法が英語で好まれる理由としては、英語圏ではそれぞれの個人が対等で独立しているという考えからきていると考えられる。対等で独立しているということは、畏怖の念を持つよりはフレンドリーな関係を保ちやすい。フレンドリーな関係であれば遠慮は必要なく相手を説得することはむしろ大事なことであり、その際は対等な立場なので情に訴えるよりは論理的な説明を心がけようとするであろう。

最後に英語教育に触れるとするならば、英語圏のドラマや映画のさまざまな特徴的な場面を教材として用いて、英語と日本語のコミュニケーション・スタイルの違いを伝えることは大いに試みられるべきであろう。

注

注：p.302の図は2021年8月8日に関西外国語大学にて行われた「リフレッシャー」で使用したものである。

使用したテレビドラマの資料：

- (1) 『大草原の小さな家』, NHK テレビからの録画.
- (2) 『スタートレック』, スーパードラマチャンネルからの録画.
- (3) 『フルハウス』, 発売元：ワーナー・ホームビデオ (1993年).

(こんどう・とみひで 外国語学部教授)